

## 『評伝 藤原銀次郎』を拝読し

金田 保男

はじめに

植地勢作氏著書『評伝 藤原銀次郎』を拝読し、単に藤原銀次郎の「人物評」ばかりではなく、「経営哲学」「王子製紙に限らない日本産業の辿る道」等現実を見て行動する、現在では経営学者「ドラッカーの経営哲学」同様の考え方を、この時代に既に実践され、植地氏の視点も見逃すことなく焦点を当てており、この慧眼に驚きを覚えます。

## 3章 大海に漕ぎ出す

30 頁冒頭に植地氏が述べているように、藤原銀次郎は松江日報社、三井銀行、三井物産において各業種の現実経営実務を観察し、台湾の製糖事業の可能性調査、樺太森林調査とパルプ事業計画においても机上ではなく自分の目で確認している。(ドラッカーの3 現主義である) また植林の大切さに気を配っていた藤原は「伐った木は植える」をモットーに実際に植林させていた。(現在ではサステナブルと称しているが、現在の状況を私金田は本気度が低いと感じている)

## 6章 国政に参画

私金田は、もの心付いた頃から小学校一杯迄、北海道後志支庁（現在の名称：後志総合振興局）ニセコ町に育ったこともあり、植地氏が記述されている北海道、小樽、室蘭、苫小牧の産業背景は私の記憶を含めて思い当たる内容が詰まっています。

## 119 頁「石炭の輸送問題」について

小樽は「鯨御殿」を見に行く方が多いが、私の子供のころから石炭の出荷基地として栄えた港です。小樽を産業という立場で見ると、海に面した港で（小樽駅から見えませんが）市街地は山側の一段高台に位置しています。当時の石炭輸送問題で、小樽港は少し西風が吹くと積み込み不能になっていた。問題は待遇面にあると看破した藤原（商工大臣）は、「金で面を張って石炭を運ぶべし」という乱暴な主張をしたくだけは面白い。

## 124 頁 北海道・室蘭製鉄所査察に関して

藤原は昭和 15 年米内内閣商工大臣に就任している。藤原に課せられた課題は焦眉の急となっていた電力、石炭の問題であった。124 頁藤原は釜石、室蘭の製鉄所を視察し急務となっていた鉄、石炭、電力の増産に奔走し増産を図った。最近私金田は、現在廃止路線となっている、「北海道の胆振（いぶり）（線）〔（室蘭本線）伊達紋別駅→洞爺湖東岸を越えて→京極→（函館本線）倶知安駅の路線（約 83 k m）が

何故廃止に追い込まれたのかを調べていた。そもそもこの路線は、倶知安から産出される粉鉱（鉄）を室蘭に運ぶ目的で計画された路線である。戦時中外国から原料調達が困難な時代倶知安の鉱山は安定的に供給できる有力な資源を埋蔵していたという。昭和新山の隆起や、洞爺湖付近の爆発で、線路は隆起沈降を繰り返していたが国策の為に、線路の迂回や保線を繰り返し1日も運行を止めることは無かったという。埋蔵鉄鉱床の枯渇により徐々に廃止区間が増え、ついに1986（昭和61）年11月1日に全面廃止。（出典：鉄道歴史地図データ）室蘭製鉄所に関連する著書の記述は、胆振線の消長を知るうえで役に立ちました。

## 9章 藤原銀次郎に対する世評

いろいろな方の世評を列挙している中で、166頁 菅原通済（三悪追放で有名）の評伝が出てくるとは思っていなかったが、この人にして当人の世評は当を得ている。（金田）

### 『評伝 藤原銀次郎』を拝読して

植地氏は「藤原の思想形成の過程究明」という焦点を外すことなく、一生を通じて書き出した論文に敬意を表します。論文構成も見事で、写真原稿も説得力があります。

金田は植地氏が「茶道」にも精通していることを妙に感じていましたが、「第7章「スウェーデンに茶室「瑞暉亭」を寄贈」の資料から納得しました。

今回植地氏の集大成として編纂された著書を拝読し、「論文とはこういうものか！」と改めて感じております。ありがとうございました。

放送大学神奈川同窓会 金田 保男